

実践型映像教育を通じたキャリア意識の形成

— NYFA におけるヒアリング調査の分析 —

後藤 昌人
Masato GOTO

小室 達章
Tatsuaki KOMURO

Research on Carrier Consciousness Development by Practical Screen Education
: Analysis of Interview Investigation in NYFA

1. はじめに

我々はこれまで、撮影技術の習得や映像の編集などのデジタルコンテンツの制作に関する教育を大学でおこなってきた。映像の制作には、知識や技術のみならず、企画力、人とのコミュニケーション力、現場での対応力など、多岐に渡って実践的な能力が必要となる。そのため、これらの能力を育成するために、実践型映像教育のあり方を模索し、試行錯誤をしながらその教育をおこなってきた。そして、時を同じくして本学の国際情報学部での海外研修必修化に伴い、「ロサンゼルスにおけるユニバーサルスタジオのバックロットでのショートフィルム制作」という研修プログラムを立ち上げ、実践型映像教育の1つの形を作り上げた。この海外研修における提携先が、New York Film Academy（以下NYFA）である。NYFAは、主に映画教育を専門とし、実践型教育において定評のある教育機関である。そのNYFAで、世界規模の実践的な映画教育を目の当たりにした。それらが動機ともなり、これまで、NYFAのロサンゼルス校、ニューヨーク校、オーストラリア校におけるカリキュラムの分析、関係者へのヒアリング、教育環境の視察、産業との連携等を調査し、その実践型映像教育の有効性を明らかにしてきた。その結果、映像制作における実践型教育の有効性には、徹底した基礎教育と、実践への応用を見通したハイレベルな専門教育による知識や技術の獲得に加えて、産業との連携や、実践的かつ体系的な教育環境とカリキュラムを通じての学生のキャリア意識の形成が重要となることが明らかとなった¹。

学生のキャリア意識の形成が重要となることを指摘する一方で、これまでの研究では、

¹ 過去の調査については、後藤・中田（2013）、後藤他（2014）を参照。

教育を提供する学校や教員に対してのヒアリングが中心で、カリキュラムや教育環境のあり方に焦点を当ててきた。そのため、教育を受けている、あるいは受けてきた学生側の視点からのキャリア意識の考察に欠けており、NYFA が提供している教育の効果について十分に測ることができなかった。そこで、NYFA ニューヨーク校とロサンゼルス校の両校長に協力を得て、在学生、卒業生、TA の合計 9 名に対してヒアリング調査をおこない、彼らのキャリアデザインについて考察を加えることとした。

今回のヒアリング目的は、NYFA で学ぶ学生のモチベーションをはじめ、学生は NYFA の教育やカリキュラムについてどう思っているのか、そして、学びの中で最も印象深い経験を聞くことで、どのような学習成果があり、自分の将来のキャリアをどう考えているのかを明らかにすることである。その中で、過去に調査をしてきた NYFA の教育やカリキュラム、ハリウッドやニューヨークという教育を受ける環境などの「原因」と、学生のキャリアデザインでもある職業意識、モチベーションなどの「結果」との関係性を考察する。

以下、第 2 節では、本研究における映像教育の捉え方とヒアリング調査の概要について述べる。第 3 節では、ヒアリングの結果を整理して示す。第 4 節では、ヒアリング結果をもとに NYFA での教育の効果について分析と考察をおこなう。その際に、キャリアデザインの分野で用いられる、トランジション・サイクル・モデルを参照しながら考察を深める。第 5 節では、考察をさらに深めるために、調査で明らかになったあるコミュニティの存在について述べる。そして、第 6 節で結びとする。

2. 本研究における映像教育とヒアリング概要

本節では、ヒアリングの概要について整理するが、まず本研究における映像教育について述べておく。まず、本研究でいう映像教育の「映像」は、なんらかの意図を持って撮影や編集をした映画のようなコンテンツのことを指し、単にカメラで連続的に動く絵を撮影した「動画」は、映像に包括される素材として考える。技術の進歩やスマートフォンの普及などにより、動画の撮影や編集が一昔前よりもはるかに容易におこなえるようになり、撮影した動画は YouTube など、インターネット上の共有サイトで簡単に公開し共有することが可能である。今では動画は人々の生活において、当たり前ものとなり、一部の企業活動やマーケティングにも欠かせないものとなり始めている。

動画と映像との比較で言えば、一般的に、動画制作は誰でも簡単に短時間でできるメリットがあるが、映像制作は機材も高く撮影や編集に多くの時間と労力を必要とするといえる。もちろん撮影をただけの動画にも、内容によっては価値の高いものも存在するが、映像と比べて、手軽に撮影することができるため、それを撮影することを通じて、

いわゆる職業として成立することは難しいといえる。一方、映像は、テレビ、広報資料、映画などに代表されるように、それを撮影することが職業として成立している。そして、その職業は、専門的知識・技術を有した専門家集団によって成り立っている業界ともいえる。

本研究では、職業として成立している「映像」に関する職業意識を考察の対象とする。映像を作り出すためのカリキュラムや方法論などの教育のあり方だけに留まらず、それらの教育を通じて、どのように職業意識が芽生え、それ以降のキャリア意識がどのように構築されていくかという、実践型映像教育を受けた学生たちのキャリアデザインに焦点を当てたヒアリング調査をおこなう。

今回の調査では、ニューヨーク校で5名に、ロサンゼルス校では4名の卒業生・在學生にヒアリングをおこなった。調査期間は2014年10月15日～10月25日の10日間、前半はNYFAのニューヨーク校で、後半はNYFAのロサンゼルス校にておこなった。ヒアリングをおこなった対象者の属性は以下の表の通りである。

表1 ヒアリング対象者属性

対象者	在籍校・卒業校	現状	性別	出身国	主な専門
A	ニューヨーク校	卒業生	男	スペイン	監督
B	ニューヨーク校	卒業生	男	アフリカ	監督
C	ニューヨーク校	在學生	女	アメリカ	未定
D	ニューヨーク校	在學生	男	アメリカ	未定
E	ニューヨーク校	在學生	男	アメリカ	未定
F	ロサンゼルス校	卒業生	女	アメリカ	女優
G	ロサンゼルス校	卒業生	男	ポルトガル	脚本
H	ロサンゼルス校	卒業生	男	日本	監督
I	ロサンゼルス校	TA	男	アメリカ	監督・DP

また、ヒアリング対象者全員に共通する質問項目は以下の5つである。

- ① NYFA に来た動機について
- ② NYFA の教育プログラムやカリキュラムについて
- ③ NYFA での最も印象深い経験について
- ④ 先生からの最も印象深い言葉やアドバイスについて
- ⑤ NYFA を卒業した後のプランについて

3. ヒアリング結果

本節では、ヒアリング項目①～⑤の質問項目に対しての回答を示す。複数人の重複回答もあるため、箇条書きにて示す。そのため、一人の回答が一つの箇条書きに対応する訳ではないことを断っておく。

① NYFA に来た動機について

- 監督や脚本家になりたいという目的があったため
- 母国で奨学金がとれたから
- 大学を卒業後一度働いた後、勉強をしなおしたいと思ったため
- 世界的に見ても一年などの短期間で効率的に学べる環境がそろっていたから（一年で学位が取れる）
- 他の学校で三年かかってやるようなことを一年間で勉強できるから
- NYFA の環境で勉強をして、経験を積みたかったから
- インターネットで NYFA があることを知ったから
- 一年間で二十数本のショートフィルムを作成するなど、実践的な環境や授業があることを知ったから

② NYFA の教育プログラムやカリキュラムについて

- 自分にとっては NYFA で提供されるすべてがベストなものである
- 目指す専門以外の分野もすべて学んで経験ができることがためになる
- 多様な学びが用意されているため、主目的は何であれ誰にとってもためになることが多い
- ユニバーサルスタジオのバックロットを使っての撮影は他にはないプログラムだと思う
- 実際の撮影を通じた実践的なカリキュラム（Hands on 形式）に一番の魅力を感じる
- 短期間で集中的なプログラムは無駄な時間を過ごしたくない人には最高のプログラムである
- 自主性を持って望めば、やりたい勉強や役割をかなえていける

③ NYFA での最も印象深い経験について

- 実際に映画を制作できるという経験
- 自分が考えた台本にそって、自分が現場で指示をしてその通りに役者が演じてくれ

ることが経験できたこと

- NYFA に来る著名なゲストスピーカーの話
- 先生からの質問攻めに合い、みんなの前で悔しい想いをした経験
- 授業や卒業プロジェクトを通じて自信をつけたこと
- 自分の映画を一本撮るという経験から得たこと（現場での経験）
- これまで出会ったことが無いくらい凄い講師陣がいて、学べたこと

④ 最も印象深い先生からの言葉やアドバイスについて

- 先生から発せられるすべての言葉にいつもびっくりさせられる
- 自分の作品なのだから、自分の作りたいものをぶれないようにつくること
- 一生懸命、勉強や仕事をし続けること
- 絶対に今やっていることや努力をやめないこと
- 失敗ができるのは学校にいる今だけだ（働きだしたら作りたいものは作れない）
- 自分では一生懸命にやったはずが、ある先生から君ならもっとよいものができるはずなのにと残念がられたこと
- 現場でもらう何気ない一言が非常に役に立つ
- 監督など自分の立場が上になればなるほど、どんな役割のクルーに対してでも優しく丁寧に接しなさい
- どんなに小さな撮影でも照明や音声などをしっかりおき、負荷がある人に集中しないように心がけること

⑤ NYFA を卒業した後のプランについて

- 一年 NYFA で TA として働きながら仕事を探す
- 厳しい環境の中でプロダクションを探す
- ロサンゼルスで、あるいはニューヨークで働くことを目標にやりたい
- できる限りニューヨークに住み続け、長期には自分が伝える価値があると思ったストーリーを映画で伝え続けたい。短期的にはそのために、ファンドを探したり、他の人の映画を撮るクルーとして働くことを考えている
- このフィールドで何としてでも仕事を得たいと考えている
- すぐに就職とかではなく、ホームタウンに戻って自分のできる限り映画を作り続けることをしたい
- 国に戻って監督として映画を撮り続けたい。そのためにお金ができればすべてを映画制作のために使うつもりだ

4. 分析と考察

これまでの研究において、NYFAにおける教育の理念やプログラム、カリキュラム、教育環境の面で調査をおこなってきた。本研究では、今までの調査で不足していた学生からのNYFAに対する視点でヒアリングをおこなったが、教える側の理念や教育環境構築と学生側のNYFAの教育に対する満足度や自身の成長やスキルアップの実感とが見事に一致していることが明らかになってきた。その根底には、徹底したNYFAの実践型教育が大きく影響しているように考えられる。NYFAに来る動機やきっかけは皆様々であるが、ヒアリング対象者の多くが、実践的な教育に対する印象の良さを実感とともに評価している。そして、グループやチーム、コミュニティとの結びつきの中で、学習と自分のキャリアを自然と意識付けしながら映画制作や技術の習得がおこなわれている。つまり、学生は何らかの目的を持ってNYFAを学びの場として選び、NYFAでの実践的な教育を通じて自らの専門性を高め、コミュニティを通じて周辺スキルやレベルの向上を図り、映画の制作に仕事として関わる場を探して行動する、という一連の流れが生み出されている。

これらのキャリア意識の形成は、金井（2003）が提示した、キャリアデザイン論の立場から導き出されたトランジション・サイクル・モデルの構造に類似する²。トランジション・サイクル・モデルは、以下の1～4のサイクルで、再帰性がある。また一周回るたびに前よりも発達しているか、より自分らしく生きられるようになっているかが鍵となっている。

1. キャリアに方向性を持つ
2. 節目だけはキャリアデザインする
3. アクションをとる
4. ドリフト（流れに身を任せる）も偶然も楽しみながら取り組む

本研究では、NYFAでのヒアリング結果をトランジション・サイクル・モデルの理論をベースに分析および考察をおこなう。

(1) NYFAで学ぶ動機

トランジション・サイクル・モデルにおける第一段階に対応すると考えられるのが、NYFAで学ぶ動機である。例えば映画監督になりたいなど、本人が強く願う夢や目的が明確になっている学生が多い印象である。また、その思いを実現する場として、NYFAの実践的な教育に魅力を感じて入学を決める学生は多い。また、映画に関して

² キャリアデザインにおけるトランジション・サイクル・モデルについては、金井（2003）p.99を参照。

世界をリードし続けてきた、ハリウッドやニューヨークという場が、各自の夢を叶える場としての大きな動機づけになっているとも考えられる。ただし、より具体的な目標イメージを持っている学生が多い要因として、一度仕事をした経験を持っている人や大学を卒業した後に勉強をしないかと考えている人が多く、年齢も通常のカレッジ入学者よりも高い点はあるだろう。いずれにしてもキャリアデザインをする上において、志を持つ多くの学生にとって、十分説得力のある材料が揃っている環境であることがわかる。また、ヒアリングでも数人からの回答にあったが、他の大学や専門学校よりも短い期間で学位をとることができる、という回答からも、少しでも早く、その世界で仕事ができるようになる、という意識が高まるのだと考えられる。

(2) NYFA での教育

学生が受ける教育のカリキュラムや環境、仲間といった要素は、トランジション・サイクル・モデルにおける第二・三段階に対応すると考えられる。まず、カリキュラムに関しては、ヒアリングをしたすべての学生が満足感を示している。その中で特にキーワードとして出てきた言葉が Hands on 形式の授業についてである。Hands on とはカメラなどを実際に手に取り、実践形式で練習をしたり、レクチャーを受けたりする授業である。また、学生は、自分が専門とする分野を超えて総合的に映画制作について学べることに對しても高い価値を見出している。例えば、自身が監督志望であっても、カメラや照明、音声といった他のロールに関する知識や技術を一通り覚えて身につけることで、チームとしてある役割で関わったときに、他の立場を理解した上でそれぞれが撮影を遂行できることを目的とした教育方法である。つまり、彼らは自然と自身の立場や専門を俯瞰して見るようになってきていると考えられる。

この点に関しては、レイヴら（1993）が正統的周辺参加という、ゆるやかな条件のもとで実際に仕事の過程に従事することによって業務を遂行する技能を獲得していく過程に近い状況といえる。チームワークが重要になる映画制作において、実践的な共同体で養われるこの力は非常に重要なことである³。さらにヒアリングでは、休日を返上でチームごとに何本もの短編映画の制作をおこなう事実やそこに対する教員の指導も厳しいものであることもわかってきた。ヒアリングでも、対象者 H は、この繰り返しおこなう短編映画の制作によって、他の学生の才能や能力に衝撃を受け、自己の意識や専門性を見直すことがあるという。しかし、教員に対する評価が高いことから、このような厳しい教育の裏に学生に響く的確な助言がされていることも、ヒアリングで明らかになっ

³ 正統的周辺参加についてはレイヴ他（1993）、佐伯胖（2014）を参照。実践コミュニティについてはウェンガー他（2002）を参照。

てきた。

このことから、キャリアデザイン論で言われる「節目をくぐる度に一皮むける」経験をすることが、NYFA の教育の中に多く、また教育を受ける学生もその実感を持っていることがわかる。彼らの中で日々の授業やプログラム、ワークショップ等を通じて、一皮むける経験を短い期間でより多く得ることができる仕組みがあり、自身のキャリアについても自信と共に具体化していくのであろう。

(3) NYFA 卒業後の仕事としての意識

ヒアリングの最後の質問で、卒業後のプランについて聞くことができた。その結果からも、学生自身も映画業界で仕事を見つけること、そして成功することの難しさや門の狭さは十分に理解しており、NYFA を卒業した学生はなおさらその感を強くする。また、出身や母国は違っても教育を受けてきたニューヨークやロサンゼルスで仕事がしたいと考えている学生も多く、教育の中で場所に対する魅力や価値が醸成されることがうかがえる。しかし、着目したいのは、特に卒業した学生で、仕事に対しての不透明感がある中でも、前向きに将来のプランを貪欲かつ具体的に考えている点である。NYFA で一年や二年、徹底的に学んできた学生には、卒業する頃には、「何とか食べていける」という自信をもっていると思わせるほどの雰囲気があり、また事実、そのような「つなぎ」の仕事や、それをバックアップする NYFA での TA のような仕組み、またコミュニティが成立している状況が明らかになった。これらは、産業とのつながりを持った教育環境構築という側面において、重要な一端を担っている。

トランジション・サイクル・モデルの第四段階に当たる部分に、「ドリフトも偶然も楽しみながら取り込む」という従来の合理的意思決定論と対峙するような考え方がある。NYFA の学生の日々の意識は、必ずしも就職だけに集中しておらず、よい作品を作ることや自身のアイデンティティを高めることにも集中しながら、偶然も含めて巡ってくるチャンスを楽しみながら待ち構えることができる環境に支えられているとも考えられる。この環境という面において、我々は今回の調査で新たな知見に繋がる要素を、あるコミュニティの存在を通じて知ることができた。次節で、このコミュニティについて述べておく。

5. 自主制作コミュニティについて

今回のヒアリングを通じて、ロサンゼルス校での対象者でもある現在 NYFA で TA として働いている K 氏（ヒアリング対象者 I）に、自身が撮影監督を務めた映画の試写会の誘いを受けた。街中にある小さなシアターが会場であったが、そこに自主制

作系の映画を制作している人々が集まり、各自の作品の試写や脚本のアイデアに対するディスカッション、あるワンシーンをその場で実際に演じて、オーディエンスから意見や評価をもらうなど、いわば自主制作映画に関するコミュニティが成立していた（写真1）。しかも、かなり熱心な議論や意見交換がされており、会場には作品に対して出資の可能性を示唆する人までいた。K氏にさらに詳しく聞くと、このような映画コミュニティはロサンゼルスでは多く存在し、日夜このような活動は街の至る所でおこなわれているという。また、このコミュニティには、UCLA（University of California, Los Angeles）などの大学も組織の立ち上げや運営に関わっていることもわかった。会場にいる人々にとっては、映画のクオリティを高める場所であると同時に、映画の世界で稼ぎながら生活をしていくことに繋がる場にもなっている。さらに、映画関係の業界で成功するためのヒントや常識、ルール、同業者とのコミュニケーションに至るまで、その世界で職業人として生きていくための基盤になる力が身につく場とも考えられる。

つまり、本研究で意識してきた、産業と一体化した実践型映像教育という点において、一般企業や大手の映像制作会社であるユニバーサルやワーナーなどとのつながりの重要性も見てきたが、現実には就職なども非常に厳しい現状がある。しかし、卒業してから大きな仕事を得るまでの環境として、半分ドリフト状態でありながら次のサイクルに向けた準備を進めることができるコミュニティの存在は、その道の職業人になりたいと思っている彼らにとって非常に意義深いものであることがわかった。



写真1 自主制作映画コミュニティ

6. おわりに

本研究では、NYFAの学生と卒業生にヒアリングをおこなうことで、教育を提供する側の視点に加え、教育を受ける側の視点から、NYFAにおける実践的な映像教育の

効果について考察を深めてきた。今回は9名に対してヒアリングをおこなったが、結果として、学生や卒業生はNYFAでの教育に非常に高い満足度を示していることが明らかになった。特に実践的なカリキュラムには入学前も含めて強い関心を持っている人が多く、入学後も実際の短編映画撮影を通じて、実践力と技術力を身につけることに繋がっている。入学当初は自分が専門として学ぶことが不明確な学生でも実践的な授業や教員とのコミュニケーションを通じて、徐々に明確になっていき、制作に対して高い意識が形成されるプロセスがあると考えられる。そこには自分の立場に責任を持たせる工夫と自分の専門を俯瞰させる仕組みが要素として見えてきた。

また、学外にも映画制作を職業人としても成立させてゆくためのコミュニティが存在していることも明らかになった。そこには、互いを支え合い、互いの立場や専門を理解しあいながら、すぐに就職に繋がらないにしても、繋ぐための裾野の広い仕組みがある。

本稿では、これら一連のサイクルをキャリアデザイン論で用いられるトランジション・サイクル・モデルを参照して分析、考察をしてきた。そこから、NYFAで学ぶ学生は、実践を通じてスキルを磨くだけでなく、様々なルールや映画を作るための哲学、自身の表現の仕方やチームの中での立ち位置、人との接し方、協力の仕方など、その世界の職業人として制作に必要なありとあらゆることをこの一連のサイクルで身につけることができるのだといえる。映像という、視覚的に結果が明確になりやすい領域であることも一つの要因であろうが、このサイクルを短期間によりたくさん、スパイラル的に自身を向上させながらまわす教育こそが、NYFAそしてアメリカの映像教育文化を支える大きな力になっていると結論付けたい。

付記

この研究は、金城学院大学人文・社会科学研究所2014年度共同研究プロジェクト助成を受けて行われたものである。

参考文献

- (1) 後藤昌人・中田平「アメリカの映画産業を対象事例とした大学における映画教育プログラム開発に関する調査研究」『金城学院大学人文・社会科学研究所紀要』第17号、pp.21-29、2013
- (2) 後藤昌人・小室達章・中田平「実践型教育の有効性を高める教育プログラムのあり方：NYFA オーストラリア校での映画制作教育を事例として」『金城学院大学人文・社会科学研究所紀要』第18号、pp.33-43、2014
- (3) 金井壽宏『働くひとのためのキャリアデザイン』PHP 新書、2002
- (4) 金井壽宏『キャリア・デザイン・ガイド—自分のキャリアをうまく振り返り展望するために—』白桃書房、2003

- (5) ジーン・レイヴ、エティエンヌ・ウエンガー 『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加—』産業図書、1993
- (6) 佐伯胖「そもそも「学ぶ」とはどういうことか：正統的周辺参加論の前と後」『組織科学』第48号第2巻、pp.38-49、2014
- (7) エティエンヌ・ウエンガー、リチャード・マグダーモット、ウィリアム・M・スナイダー 『コミュニティ・オブ・プラクティス—ナレッジ社会の新たな知識形態の実践—』、翔泳社、2002
- (8) 松尾睦『経験からの学習—プロフェッショナルへの成長プロセス』同文館出版、2006
- (9) 金子満『映像コンテンツの作り方—コンテンツ工学の基礎』ボーンデジタル、2007